

1991年出土の木簡



(長野)

本遺跡は、現水田景観に

長野・石川条里遺跡 いしかわじょうり

1 所在地 長野市篠ノ井塩崎

2 調査期間 一九八八年（昭63）六月～一九九一年（平3）五月

3 発掘機関 勝長野県埋蔵文化財センター

4 調査担当者 白居直之

5 遺跡の種類 居館・祭祀・集落・水田跡

6 遺跡の年代 縄文時代前期・弥生時代中期～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

石川条里遺跡は、千曲川左岸、長野市篠ノ井塩崎の南西部に広がる水田地帯、千曲川の自然堤防によって隔てられた大規模な後背湿湿地に立地しており、標高三五六m前後である。遺跡の東側の自然堤防上には弥生時代から平安時代に至る遺跡群が並び、西側の山麓部には、川柳将軍塚古墳をはじめとする古墳群が構築されている。



木簡出土状況

残された条里制地割と埋没した水田遺構からなる遺跡として、長野市教育委員会により数年来継続して調査が行なわれてきたが、今回の調査は、長野自動車道建設に伴って、約七万m²を対象として実施された。総面積六〇〇haに及ぶ後背湿地には、微地形が入りこんでおり、本発掘調査においても微高地が二ヵ所確認された。

微高地では縄文・古墳・古代・中世の各時代の遺構・遺物が検出され、とくに古墳時代の遺構群は祭祀的な性格をもつ特殊なものとして注目されている。低湿地では弥生中期からの水田遺構が確認さ

れ、弥生時代後期・古墳時代・平安時代の各水田跡からは多量の木製品が出土した。

木簡は、微高地から一五〇m程離れた水田域から出土した。中世の水田遺構面は良好には検出されなかつたが、現水田で利用されたいた用水路の直下に方向を一にする溝が数条確認された。これらのうち、二条の幅一m、深さ一・二mの区画溝が交差する地点の溝の堆積層上層から、折敷の破片と重なつて五点（他に小破片数点）の木簡が出土した。溝の底には、径五〇cm前後の川原石が等間隔に置かれ、石の下から元豊通宝（一〇七八～八五年）等の銅錢・金具が出土した。木簡と時期を同じくする遺構としては、微高地上に幅一〇mと四mの溝によつて方形に囲まれた居館址と推定されるものがある。二重に巡る溝による区画の内からは、銭貨・陶磁器などとともに柱穴・井戸が確認された。居館址外側を大きく取り巻く用水としての溝が、木簡の出土した溝と関連しているものと予想される。

8 木簡の釈文・内容

- (1) 「(符籙) 鬼鬼急々如律令北」
〔(符籙) 水急々如律令西〕
〔(符籙) 〔匁カ〕〕
249×46×5 011

9 関係文献

- 長野県埋蔵文化財センター『長野県埋蔵文化財センター年報』5
~8 (一九八八～一九九一年)
(注居直入)

(3) 「(符籙) □□急□□□令 □」
〔南カ〕
252×50×4 011

(4) 「天□□」
250×46×6 011

(5) 「鬼鬼鬼鬼鬼鬼鬼鬼鬼鬼」
□□□□□□□□□□
〔(匁カ)〕
207×(36)×3 081

(1)～(3)は同じ形の呪符木簡で、符籙部分の小破片が他に二片出土している。この形の木簡は四枚一組で扱われ、東西南北にそれぞれ配置したものであろうと考えられる。(4)は「天」のみ判読できたにすぎないが、形の異なる(5)と同様に呪符木簡と考えられる。折敷とともに出土した状況から考えると、呪符として使われた後、まとめて容器に入れられ、さらに居館を取り巻く用水路に一括投棄されたものであろう。

1991年出土の木簡

